

PBL (Problem Based Learning 問題基盤型学習)

PBLは共用試験（CBTとOSCE）の後から始まる臨床実習のための練習です。臨床実習では、3年半に渡る勉強によって身につけた知識を使い、患者さんの問題を解決する能力が求められます。知識も大切ですが、知識の使い方を習得することも同様に大切です。PBLでは、paper patientが登場するシナリオを用いて、身につけた知識を活用し、問題を解決する能力の向上を意識してください。

日本大学医学部のPBLは複数のコースから成り立ち、それぞれのコースは少人数で議論しながら学習するコアタイムと、講義や自習から構成されます。

コアタイムでは、臨床推論のプロセスの中で、自分達が既に持っている知識の使い方を以下の様に学びます。

- 1、シナリオを音読して、医学的に意味のある情報（キーワード）を抽出する。
- 2、情報の組み合わせから、可能性のある複数の疾患を挙げる。
- 3、挙げられた疾患群の中で、個々の診断の確率について論理的に検討する。
- 4、シナリオ中のpaper patientの条件に適した治療法について論理的に検討する。

議論を介して、医師として必要なコミュニケーション能力も磨いてください。

議論する上で足りない知識は、講義や自習で身につけましょう。

<PBLにおける評価のルール>

- テュートリアルコアタイムは、テューターが出欠確認を行う。
- 10分以内の遅刻は3分の1欠席の換算とみなす。10分～20分の遅刻は3分の2欠席の換算とみなす。20分以上の遅刻は欠席とみなす。
- 出席に対する疑義申し立ては1週間以内に行う。
- PBLの知識の評価は各コースのコース責任者が行う。知識の評価は、進級判定・卒業認定制度に基づき試験により行う。
- 3年次の「神経・運動器」以外の各コースにおいて、本試・再試・追試のすべてを終えてもなお成績不良と判断された場合は「統一再試」を受験する。
- 統一再試は、教育課程表の3年次の専門教育科目としている科目のうち「神経・運動器」を除く全ての科目を出題範囲とし、統一再試の結果により知識の評価を再度行う。ただし、成績不良のコースが複数ある場合には、統一再試の受験資格を遡って失うことがある。
- 「神経・運動器」については、本試験、再試験または追試験の結果により知識の評価を行う。

- PBL の態度の評価は、学務担当、コース責任者、担当する委員会の委員長等が合議する。態度には、コースの出席のほか **PBL** コアタイムの出欠状況、参加態度（積極性、協調性、責任感等）、レポートの提出状況等が含まれる。各コースで理由なくコアタイムの **5 分の 1** 以上を欠席した場合は、態度が不適と判定される。知識テストを受験して合格点に達した場合でも、進級判定にかかわる会議において態度が不適と判定された場合は、遡って知識テストの受験資格を失う。受験資格を失った科目は「評点なし」とする。学習態度が良好な場合も進級判定で考慮される。ただし、前期の各コースの学習態度は、前期を通したコアタイムの態度を考慮することができる。後期の各コースの学習態度は、後期を通したコアタイムの態度を考慮することができる。
- 最終評価は、本学の **DP**（ディプロマ・ポリシー）を基準として、「知識・技能」と「態度」を考慮して総合的に行う。